

幼児における人物描画能力の発達

A developmental study of young children's skill in draw-a-man

石岡由紀

I 目的

従来、心理検査法としてよく知られているものは知能検査と性格検査である。特に知能検査はビネーの創案以来、数多くの検査（WPPSI、ノンバーバルテスト、新版K式テストなど）が作成され用いられてきた。しかしその一方でこれら心理検査がただ人間を分類するためのツールとして使用されることに対する懸念がなされていることも事実である。特に幼稚園や保育所など幼児教育の現場にあっては、これら標準化された検査法を使用する機会は皆無に近い状態にあるといえる。

しかし、ここ数年学校教育や幼児教育の現場において、大きな知的障害はみられないものの、他の子どもと少し距離感を感じる子どもいわゆる「ちょっと気になる子ども」の存在が注目されている。特にI：6健診や3：0健診などは問題なく通過してきているが、幼児教育の現場において、なかなか集団生活になじめない子どもや、クラス全体に対して発言されたことが、うまく理解できない子どもがいることは事実である。幼児教育現場にいる保育者はその保育経験のなかで、その子どもたちに対する一種の違和感のようなものを感じつつも、その客観的な尺度を用いることなく、日々の保育を展開しているというのが現状ではないだろうか。

特殊教育から特別支援教育への転換がなされようとしている現在、子ども一人ひとりに応じた指導計画はもとより、それを作成する基盤となる個別教育支援計画の作成が求められている。その中で特に重要視されているのは、アセスメントのあり方であろう（アセスメントのあり方に関しては別稿で述べることにする）。そこで、本研究は幼児教育現場において、子どもの発達を理解する方法の一つとして従来からなされている行動観察とともに客観的指標として人物描画（Piaget（1966, 1969）によって子どもの描画が知能発達検査として役立つことが実証されていることは周知のとおりである、本稿においてはGoodenough人物画知能検査を参考としている）を用いることの有効性について検討することを目的とする。

II 方法

参加者

対象は、兵庫県内の幼稚園男児62名、女児61名の計123名であった。精神発達遅滞、言語発

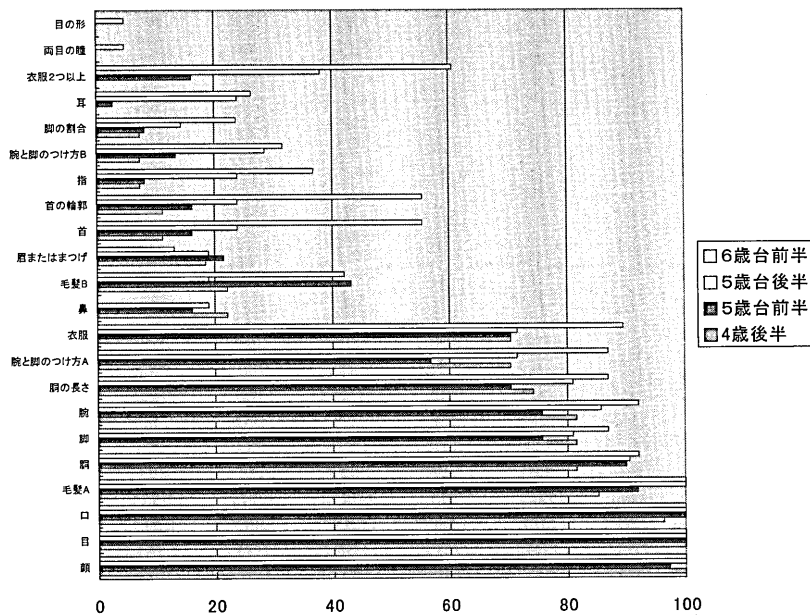


図1 年齢別の通過率

達遅滞，運動機能障害と明確に判断されるケースは分析対象から除外した。対象児の内訳は表1のとおりである。調査は2006年11月に実施した。

表1 対象児の内訳

性別	4歳台	5歳台前半	5歳台後半	6歳台	計
男児(人)	13	17	18	14	62
女児(人)	14	20	3	24	61
計(人)	17	37	21	38	123

材料と手続き

白描画用紙(縦27.0cm×横19.5cm)1枚と12色クレパス1箱を配布した。机や椅子の高さなどに配慮し，検査前のラポールを十分とるなどして，子どもが検査に集中できるような環境を構成した。検査を始める前や，その途中であっても，子どもを励ますようなことばをかけることを必要に応じて行った。

子どもに配布した白描画用紙を指し示し「この紙に先生を描いてください。頭から足のさきまで描いてくださいね。」と言い，描き始めを指示した。検査方法を理解し，描画を開始しようとしたら「全部描き終わったら『できた』と言って教えてください。」と伝えた。

採点方法

採点項目と採点要綱は Goodenough の人物画知能検査に基づいて行った。詳細は Goodenough (1926) または小林 (1977) を参照されたい。ただし Goodenough の人物画知能検査では，鉛筆を用いているが，本調査においては幼児がふだん使い慣れているクレパスを

使用することとした。

Ⅲ 結果

表2は年齢区分毎に各採点項目の通過率を示したものである。以下に年齢区分毎の通過特徴を述べる。

4歳台後半(対象児27名)では、顔と目が100%の通過率を示していた。以下口は96.3%、毛髪A(髪の毛らしきものが描かれていれば可)は85.2%、胴、脚、腕はそれぞれ81.5%、胴の長さ74.1%、腕と脚のつけ方A、衣服はそれぞれ70.4%、鼻、毛髪B(頭皮の出していないこと)はそれぞれ22.2%、眉またはまつげはそれぞれ18.5%、衣服2つ以上は14.8%、首と首の輪郭はそれぞれ11.1%、腕と脚のつけ方B(腕は両方とも肩、または肩にあたる場所についていること。脚は胴の下から出ていること)、指、脚の割合はそれぞれ7.4%で、全50項目中19項目での通過が認められた。

顔、目、口、毛髪A、胴、脚、腕の7項目の通過率は80%以上であったり、胴の長さ、腕と脚A、衣服の3項目の通過率は70%以上であったが、鼻、毛髪Bは、眉またはまつげなどは、20%程度の通過率であった。さらに首や指または脚の割合などの描画は10%程度の通過率であった。またこの年齢群で耳の描画をした幼児は一人もいなかった。

この年齢群の代表的な描画として図2を示した。顔、目、口、毛髪、胴、脚、腕、胴の長さ、衣服が描画されている。腕や脚はほぼ正しい位置から描かれているが、太さまで意識ができておらず1本線での描画となっている。さらに鼻や耳が描画されておらず、毛髪、衣服は描かれているが頭皮が見えている状態であったり、衣服らしきものが描かれているにとどまっている。

5歳台前半(対象児37名)では、目と口が100%の通過率を示していた。以下顔は97.3%、毛髪Aは91.9%、胴89.9%、脚、腕はそれぞれ75.7%、胴の長さは70.3%、衣服は70.2%、腕と脚のつけ方Aは56.8%、毛髪Bは43.2%、眉またはまつげは21.6%、鼻、首、首の輪郭、衣服2つ以上はそれぞれ16.2%、腕と脚のつけ方Bは13.5%、指、脚の割合はそれぞれ、8.1%、耳



図2 (4歳台後半)

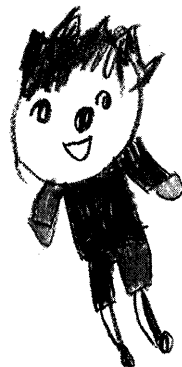


図3 (5歳台前半)

は2.7%で、20項目での通過が認められた。

顔、目、口、毛髪A、胴の5項目の通過率は80%以上であったり、脚、腕、胴の長さ、衣服の4項目の通過率は70%以上であったが、眉、またはまつげなどは、20%程度の通過率であった。さらに鼻、首、指、脚の割合など10%程度の通過率であった。またこの年齢群になり、1人の幼児（5：3）だけが耳を描画していた。

この年齢群の代表的な描画として図3を示した。顔、目、口、毛髪、胴、脚、腕、胴の長さ、衣服が描画されている。腕や脚の太さが表現され、鼻が描かれているが、印のような形でしか表現されていない。また首が出現していない。

5歳台後半（対象児21名）では、顔、目、口、毛髪Aが100%の通過率を示していた。以下胴は90.5%、腕は85.7%、脚、胴の長さはそれぞれ80.9%、腕と脚のつけ方A、衣服はそれぞれ71.4%、衣服2つ以上は38.1%、腕と脚のつけ方Bは28.6%、首、指、首の輪郭、耳はそれぞれ23.8%、鼻、眉またはまつげ、毛髪Bはそれぞれ19.0%、脚の割合は14.3%、両目の瞳、目の形はそれぞれ4.8%で、22項目での通過が認められた。

顔、目、口、毛髪A、胴、腕、脚、胴の長さの8項目の通過率は80%以上であったり、腕と脚のつけ方A、衣服の2項目の通過率は70%以上であったが、腕と脚のつけ方B、首、指、首の輪郭、耳、鼻、眉またはまつげ、毛髪Bは20%程度の通過率であった。ただし、同じ20%程度の描画通過率であっても、耳の描画通過率は5歳前半の1桁（4歳台0%、5歳台前半2.7%）の通過率と比較するとその通過率の急激な上昇が確認された。また、両目の瞳や目の形が正しく描画されている幼児が一人出現している。

この年齢群の代表的な描画として図4を示した。顔、目、口、毛髪、胴、腕、胴の長さ、腕と脚の太さも表現されているが、首と肩がまだ出現おらず、腕のつけ方が不確かである。指が描画され、毛髪や衣服に注意が注がれ、装飾品が描かれている。ただし先生を描くという指示にもかかわらず、自分の描きたい女性像を描画している。

6歳台前半（対象児38名）では、顔、目、口、毛髪Aが100%の通過率を示していた。以下



図4（5歳台後半）



図5（6歳台前半）



図 6



図 7

(肩と思われる部位より下方から腕が出ている描画)

胴, 腕はそれぞれ92.1%, 衣服は89.5%, 脚, 胴の長さ, 脚と腕のつけ方 A はそれぞれ86.8%, 衣服 2 つ以上60.5%, 首, 首の輪郭はそれぞれ55.3%, 毛髪 B は42.1%, 指は36.8%, 腕と脚のつけ方 B は31.6%, 耳は26.3%, 脚の割合は23.7%, 眉またはまつげ13.2%で, 19項目での通過が認められた。

顔, 目, 口, 毛髪 A, 胴, 腕, 脚, 胴の長さ, 腕と脚 B, 衣服の10項目の通過率は80%以上であったが, 脚の割合や耳の 2 項目の通過率は20%程度であった。この年齢群において首や衣服 2 つ以上を描画している子どもの数が半数をこえていた。

この年齢群の代表的な描画として図 5 を示した。顔, 目, 口, 毛髪, 胴, 腕, 脚, 胴の長さ, 腕と脚の太さが表現され, 首が描画されている。さらに, 衣服や毛髪がより詳細化されて描かれている。耳が出現しイヤリングなどの装飾品も描かれている。

また, 図 6, 7 に見られるように腕が肩から出ず, 肩と思われる部位より下方から腕を描く時期 (5 歳台から 6 歳台前半) が認められる。

Ⅲ 考察

ここでは, 各年齢群の発達特徴について考察する。4 歳台における人物描画の特徴は Goodenough の人物画通過率と比較することにより明らかにしたい。

Goodenough の 4 歳台後半の顔の通過率は100%, 目の通過率は93%, 胴の通過率は87.3%, 脚の通過率は85.8%, 口の通過率は71.5%, 腕の通過率は60.9%, 毛髪 A は46.5%, 胴の長さは72.4%, 鼻の通過率は73.5%, 腕と脚のつけ方 A の通過率は48.3%, 眉またはまつげの通過率は52.0%, 衣服の通過率は32.1%, 毛髪 B の通過率は12.5%, 首の通過率は12.3%, 腕と脚のつけ方 B の通過率は17.7%, 指の通過率は27.0%, 首の輪郭は12.3%, 脚の割合の通過率は9.15%, 衣服 2 つ以上の通過率は9.1%である。この年齢群で70%以上の通過率を出しているのは, Goodenough の場合, 顔, 目, 胴, 脚, 口, 胴の長さ, 鼻の 7 項目であるが, 本調査

の結果は顔、目、口、毛髪A、胴、脚、腕、胴の長さ、腕と脚のつけ方A、衣服の10項目であった。顔、目、胴、脚、胴の長さについては両者とも同じような結果が出ており、この年齢群の子どもにとって顔、目、胴、口、脚、腕というのは非常に認識されやすい部位であることがわかる。しかし Goodenough の場合は口の通過率は71.5%であるのに対して本調査では96.3%とその通過率には多少のひらきがある。この結果の表す意味は現状のなかでは明らかにすることはできないが、興味のある現象である。

また Goodenough の場合は鼻の通過率が73.5%であるのに対して本調査ではわずか22.2%であったのみならず、年齢群があがっても鼻の出現率は向上せず（5歳台前半16.2%、5歳台後半19.0%、6歳台0%）、他の部位には見られない通過率の減少が見られたのである。この時期の子どもはもちろん鼻がどこにあるのか、または顔の真ん中にある部位が鼻であることは認識しているはずである。そのため鼻を描画しない子どもたちがこのように多数を占めるこの現状は、現代において目や口に比べると鼻を使う機会が少ないことを現しているのではないかと考えられる。またその一方で、キャラクター化された人物画を目にする機会が多くなり、そのイメージが刷り込まれていることも考えられる。これは毛髪Aの通過率の違い（Goodenough は46.5%、本調査85.2%）にも現れているのではないかと考えられる。とにかくこの結果は非常に興味深いものであり、今後も引き続き調査を重ねたい。

5歳台の人物描画特徴として、4歳台と大きく変わったところは見られず、この年齢群においても、顔、目、胴、口、脚、腕という部位が認識されやすい部位であることがわかる。

今後の課題

本研究の目的は、人物描画が幼児教育現場で使用することの有効性を明らかにすることである。本稿においては、小グループにおける人物画のサンプルから、各年齢群の発達特徴を明らかにし、Goodenough が調査をした時代の子どもの描く人物画が現代においては多少の変化を見せているのではないかと示唆が得られた。しかしこれは今後さらにサンプル数を増やして検討する必要がある。

幼児教育現場で子どもたちの発達を考えるための客観的指標となるツールを用いるにはまず、簡易であること、さらに子どもたちに負担をかけることがないということが必要条件であると考えられる。その点においてはこの人物画検査は有効であると考えられる。従来から幼児教育現場で発達スケールを使用することに多少の躊躇がみられたのは事実であり、筆者も客観的指標のみを信用し本来の子どもの姿を見ようとししない保育者の姿は本末転倒であると考えている。しかし保育者はある程度の発達の段階を頭に入れ、日々の保育に従事することが望まれる。幼稚園教諭に対するアンケートにおいて、幼稚園でこの検査方法を用いることに関してたずねたところ、90%の教諭が大変良いと思う、または、良いと思うと答えている。もちろんこの人物描画検査は子どもの発達の全面を明らかにするものではない。あくまでも子どもの持っている一面（しかもそれは恒久的なものではない）を映し出すにすぎない。しかしその中から、ふだ

んの子どもの生活世界や言動の意味が見えてくることもあるのである。子どもを多面的に見るためのツールの一つとしてこの人物画検査法は有効であるものとする。

参考文献

- 高橋省己 (1968) 『ベンダー・ゲシュタルト・テスト・ハンドブック』三京房
- Piaget, J, 波多野完治・須賀哲夫・周郷博 (訳) (1969) 『新しい児童心理学』白水社
- 小林重雄 (1977) 『Goodenough 人物画知能検査・ハンドブック』三京房
- 島津峯眞・生澤雅雄 (1985) 『新版K式検査法』ナカニシヤ出版
- 山口俊郎 (1999) 「Santucci の4-6歳児の描画検査 (検査紹介・訳) 兵庫教育大学学校教育実践センター
障害児教育実践研究 6号
- 石岡由紀 (2003) 「幼児における図形模写能力の発達」九州ルーテル学院大学発達心理臨床センター年報
第2号